

裏日本道路改良宣傳旅行記 (中)

一 記 者

米子 出發 (十月十一日)

東京出發の際は前號所載の如く三隊三様であつたが、今日は中川理事と都筑幹事が午前六時に出發し、茂庭博士、佐藤武井兩幹事、東島堀兩書記は午前九時二十五分に立つことになつた。初めの豫定では一同九時二十五分に出發する筈であつたが、中川理事宛に岡山から急電が來たので、それに立ち寄りねばならぬ爲め斯く變更することになつたのである。都筑幹事は福井石川兩縣に若し中川理事が差し支へるやうな場合には、適當の處理を執らねばならぬのと、山陰山陽兩道を南北に分かつ脊梁山脈を前夜來降り頻る豪雨中に、自動車で之を突破し得る哉否やを確かめ置く必要か

ら、中川理事と共に四十曲り(伯耆——美作の國境)の難所を越すこととなり、他は揃つて山陰線で引返し京都で兩隊合して柵家に宿泊することに決定し、茂庭、武井、佐藤三氏はまだ夢醒めぬ間に中川、都筑兩氏は長谷川縣土木課長や窪田根兩助役、谷口出張所長等に送られて豪雨の中を出發した。

午前八時過ぎ中國第一峯伯耆大山の西方にかゝると風雨愈々烈しく、日野川の奔湍は恰かも味噌汁を馬蹄に驅くるやうである。川沿ひの道路は玉砂利の入れ具合も良く前夜來の豪雨に拘らず路面も相當に維持されて居るが、漸やく山道に入るに従つて道徑險惡となり。愈國境も近づき四十曲りの難所にかゝれば、なる程此處では無事通過を祈るの

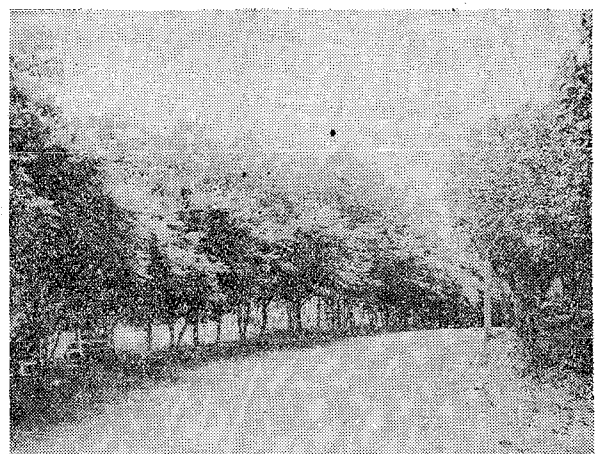
外また他を考ふる餘地はない。四十曲りを越へ國境記念碑前を過ぎて、美作國に入り一丁餘りも下りたる右方に茅葺

要するに自動車で此の脊梁山脈を越すことは夫程難事でないやうに思ふ、時間に於ても賃金に於ても最も有利且つ便利なことは明瞭であるから、兩縣に於て今少し改良を加へたならば、平時の便益は勿論一朝有事に際し其の効果蓋し大なるべしと思はれるのである。泥棒を見て繩を縋ひ、火事を見て唧筒を注文するやうな譏りを受けないやうに切望する。尙それから少し降ると鬼の窟と呼ばれる大巖窟がある。上古に吉備津彥命が鬼神を退治された處と言ひ傳へられ高さ二丈五尺、奥底は二十間以上に達して居るといふことである。

きの人家があつて運轉手等はそこで一服するうち、山氣を籠めた雨雲の漸やく薄らぐ間いまから、行くてを瞰せば勾配七分一程長數百尺の急坂や、肌へに粟するほどの箇所が尙二三箇所もあつて十年餘り生命を縮めたやうに思はれた。

ぬ岡山藩の領地であるが、田毎に黄金色の穂も重もき美作が豊穰して居る、國名が既に美作であるから、領内には豊

橋梁修繕工事の爲め途中で七八丁も徒歩連絡させられたのには閉口した、工事場の前後には車を廻す餘地が無いからとのことであつたが、我々が各地方を廻つた経験からは、僅かの手入れで立派に廻



風 雪 防 け の 並 樹

此の附近は米のなる木をまだ知ら

し得る地積があるやうに思へた。將來土木及交通行政に携さわる人々は大に注意しなければならぬ實際問題である、

穰を意味する村名もまた頗る多い、其の重なるものを擧ぐれば美甘村、芳田村、豊國村、富田村、財田村、福田村、豊田村、富原村、稻岡村、勝田村、植月村、久田村、吉田村、飯岡村、栗倉村、廣戸村、金田村、豊原村其他多數である。午前十一時四十分津山行き列車が今發車する間際に中國勝山驛に着いて飛び乗つた、若しも之れに遅るれば岡山にも京都にも福井にも電報や電話で臨機の處置を講ぜねばならず、大に迷惑する所だつたが神は正しきを愛し玉ふて列車移乗の間一髪を與へ給ふた。今朝の食事は午前五時でそれから山岳道路を搖られて上下し、もう相當腹も空いたので中食は十一時頃美作勝山の豫定にして居たが、右の次第で午後一時四十分津山驛に着いて辨當にありつく迄は如何とも仕様がなかつた。

併し苦田郡なる院の庄を通過するときには、高德が十字の詩と舟坂山とを想起し空腹などは吹飛んでしまつた、北條高時が後醍醐天皇を隱岐の島に遷しまいらせんとするを、兒島三郎高德は舟坂山の嶮に要して鸞輿を奪ひ奉つり

尊王の大旛を擧げんとしたのであるが、鸞輿は豫定の御道たる片上から和氣に入りて勝山に向ふを急遽變更して、多數の賊軍前後を擁し上郡から上月（佐用郡）を経て勝間田（勝田郡）に向はせられたといふので、高德の黨類は士氣喪して各自舟坂山を下り、或は備中に或は備後路に三々五々中國根性を表現したのは頼み甲斐なき次第であつた、夫れでも紅一點の高徳唯獨りは間道から追ひ奉つて、遂に院の庄なる御假宮に臣子の至情を十字の詩によつて叡聞に達したのは稱揚に價する。

天莫空勾踐

時非無范蠡

此の櫻樹の址と御假宿が今の作樂神社（院の庄）であつて吾々も袖を濡したのである。午後一時四十五分私線中國鐵道に乗換へて岡山に向つた、途中に古川山手鑛山、三井佐野鑛山、伊田鑛山等がある爲か鑛山タイプの紳士が弓削驛や玉柏驛等で乗降した、午後三時五十分法界院の岡山水道淨水池を右に見て同四時五分岡山市に着いた。

中川理事は直ちに岡山醫大病院に、都筑幹事は後樂園を

左りに六高を右にして操山みさきに登り三勳神社みさきに參拜した、祭神は和氣清麿（九州宇佐八幡に神勅を請ふた忠臣）、楠正成

既に五時、急いで操山を駆け降り岡山驛頭で中川理事と會し午後五時廿五分、米の實る木と吉備團子各一箱を購入して同驛から乗車し、京都行列車中で

（笠置山城國相樂郡下大和國添上郡界）の御夢に現れた忠臣、

兒島高德（幸庭の櫻樹に赤き心を墨で奏した忠臣）の三

柱である。後樂園には四季常に人

聲を絶たないが三勳山に賽する者

は甚だ稀であると聞いて世潮の輕

薄を歎かざるを得なかつた、後樂

園は貞享三年藩主池田綱政侯以來

屢々茶邸の改造と林泉の美を加へ

たから、米の實る木を知らぬほど

の大手等には命の洗濯場として恰

好の遊園であつたらう。けれど天

然の風光は操山から兒島灣を望む

ところにあると思ふ。

夕暮の空に何處からか二三の汽笛が響いて來た、時計は



支那から夫れらの似物が逆輸入されて本物と偽物との混

戦を演じ眼が利かぬと飛んだことになり、ますますと言つて四

兒

美人から寄贈されたデセル同様、處變り品變る名物も亦風味好いものである。岡山の名所名物や森永の提

島

灯は是れ位にして瀬戸驛から乗車した人の陶器懐古談を傾聴した、往時は唐渡りにも劣らぬ瀬戸焼と肥前の

高

唐津焼とに止、めを刺したが、其後唐津に次で伊萬里焼、瀬戸物に次で

徳

伊部焼が現はれ、それから清水焼や萬古焼と擴張され遂には九谷陶窯

株式會社や瑛瑯製陶會社となり今や

五種の見本を示された。成る程獨逸製支那製日本製琺瑯陶器の差や日本九谷と支那九谷との出來榮を較べると、努力を要することが判かる、徒らに勞働演舌會とか販路擴張費とかいふ上りのみに浮身をやつすのは如何なものでせうと言ふので、筆者もまた實質的の改良進歩に盡くして永遠の國策に努力しなければならぬと答へたら、其の乗客大いに共鳴して出した名刺を見ると、中京にある某陶業會社の重役で成程と思はれた。汽車は早や萬富の鐵道橋(旭川・長二五五間)に差しかゝつた。有名な香々登の臥龍松は此處から一里位いの處にある。大正十年の夏山陽道自動車旅行の際には錦鷄間祇候だつた石黒博士や今の松本鹿兒島縣知事(當時内務省道路課長)や細野鐵道書記官等と、松の家主人一井義明氏の椽側で香川知事から説明を聞いた、それは田中土木事務官が山陽道道路改良宣傳旅行記中に半分程書きかけてあるから(尤も滿五年餘になるから忘れた人もあらうが)省略する。其頃東西二十二丈餘南北十七丈あつたことなど記憶を辿つて居るうち伊部窯陶會社の煙も遙か

後ろに和氣驛を過ぎて、吉永驛の案内揭示に實成寺……和氣清麿公墓、閑谷巖……東南二十三町とかあつた。閑谷巖は寛文六年に新太郎少將池田光政侯が創立したもので、彼の熊澤蕃山先生が藩の子弟を實質的に教養した學舎である、挿圖の池も實に其の子弟等が設計及築造から田畑への引き畔まで凡てを實習用として作つたもので、今日に至るも其の徳にうるおつて居るものが藩の内外に少からずある。

舟坂山の隧道(二石隧道-長六四五間)を出て上郡、有年、那波などの驛を過ぐると暮色も愈迫まり、咽煙彷彿の間に元祿の昔大石良雄等を輩出した赤穂を望み、更に徳川時代に四國九州方面の大小名が參觀交替の着船所として居た室津港方面から數臺の自動車がヘッドライトの光芒を連ねて、龍野方面に十數哩の速力で進行するのを眺めながらボーイの案内で食堂に入った。會根驛を過ぐる頃窓外が明るくなつたので考へて見ると今宵は恰かも舊曆の満月で、少し前まであつた雲も消え去り、秀吉の築いた姫路白鷺城の天主閣も、謠曲や長唄などで名高い高砂の松、會根の松、

尾上の松、相生の松、手枕の松、都戀しき片敷の松、老松、若松、五葉松、姫ヶ小松に便り松、妾しやお前の文男松等いふ名松も月の鏡に映つて居るやうに想はれ、其れから寶殿も過ぎ加古川の鐵道橋（長二三四間）にかゝると指呼

やう、それは明石や舞子や須磨さては六甲寶塚の觀察を田邊部長に無斷で書いたら、あのロイド眼鏡の下から笑つた丈けでは濟まさないであらう。また大阪府管内をも無斷で通過したとあつては牛島部長や與村課長が直ちに田邊部長

の間に加古川の道路橋（長二一〇間）が繪のやうに浮出して居る。これは大正十三年八月十一日に四十六萬七千圓で同地町役場と一緒に竣工式を舉げ其の祝賀記念として銀製菓子皿を寄贈されたが、自分の手に這入らぬうち松といふ字のつく某縣道路主事が新家庭を作るからとて箱の儘持つて行つて了つた、其の爲か時折竹の皮に包まれた「のし梅や」「梅羊羹」を持つて上京する、これで松竹梅揃つたからあつさりおとなしく村山勅待部長の本陣たる京都に直行し



満 定、(實は敬意を表したのであるが下車する時間が無いので奚許痛矣痒矣である) 依つて大阪兵庫兩府縣管内の觀察のや批評は又の機會に譲ることにする。

京 都 着

京都七條停車場に着くと驛には關谷府道路課長、丹羽道路主事、齋藤京都府尹其他が 出迎へられ、且つ今度勅任を以て待遇せらるゝことゝなつた村山部長や市の電氣局長永田兵三郎氏、帝大教授の安田

靖一氏、其他今度洋行する谷技師等が参集して、七時過ぎに山陰道線で先着した茂庭武井佐藤堀東島五君に夕飯を出して居る所であるから、是から直ぐに列席せよとの事であるが、時間も遅いし疲れて居るから再應辭退したのであるけれど、鳥渡でも顔を出せと言はれ祇園の中村樓に着いたのはもう十時を過ぎて居た。鄭重なる饗應は頗る美味佳肴に富み約一時間は盃の獻酬頻繁且つ急速力にして午後十一時半一同盃し、其れから府の幹旋による柵家旅館に往つて寢に就いたのは、彼是れ十二時に近かつた。

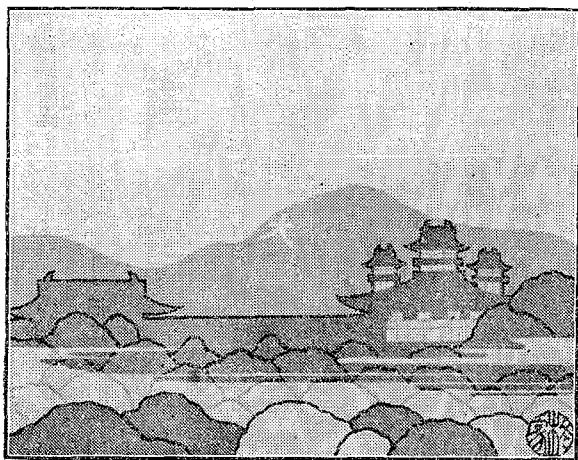
京 都 發 (十月十二月)

午前九時七條驛發福井市に向ふ。前夜の諸氏及び柵家主
人其他に送られたが、満員で挨拶も碌に出来ない勿論腰掛
る場所などは少しもないのである。洗面所の中から前後の
乗降口まで青切符連青くなつて洋服の襟を立て、居る、赤
切符は無論赤くなつて怒鳴つて居る。京都驛では必ず東
寺(弘法大師の創建した真言宗の寺院で教王護國寺といふ

のを略して東寺と呼んで居る)の塔が見へるものと思ひ安
心して乗つて居た婦人子供連れの人が稻荷驛迄來て氣が付
き下車したのは誠に氣の毒であつた、併しお蔭で茂庭中
川兩老は座席が出來たので、赤鳥居と朱樓と老松の翠りが
旭に照榮へて居る官幣大社稻荷神社に車中ながら默禮して
感謝の祈りを捧げた、坂上田村麿の墓所は左の窓から、また
右の窓からは秀吉が觀櫻の盛宴を張つて淀君のモダン心を
満足せしめた千疊敷花見山を望見しながら汽車は山科驛を
さして進んで行く、忠臣藏で有名な由良之助浪宅の趾は驛
から南西二十丁許りの竹藪の陰である、また驛の直ぐ西方
三四丁程の小來栖こきりには馬喰の竹槍で一命を墜した明智光秀
の饅頭塚がある、斯く山科驛を廻りて殘る田村麿、秀吉、
光秀さては大石等の賣れつ兒物語も天地の悠久に比すれば
只だ一場の夢である、「窓をお締め致します」と丁寧にボー
イ君が逢坂山の長トンネルに近づいたことを豫告して歩
く、此の隧道上には二號國道が通つて居り、其の北側には
蟬丸の社や關寺小町の址、南側にはうなよと稱する日本一

の鰻ホールや、走り水走り餅等色々なものがある。『山は富士、鰻は生なよ世日本一』と自慢し琵琶湖育ちの鰻を鴨川で暫らく磨きをかけた後、關の清水（走り水の別名）で洗つた選り抜きのもので、走り餅は走り水で鮎の形に作つた餡入りの餅で草津の姥ヶ餅より近來實行が多いといふことである。

トンネルを出れば人口六萬三千の大津市を眼下に琵琶湖を望み風光掬すべきものがある、こゝで近江八景見物の一團が下車したので我々も漸やく座席を得た、驛から西北の方半里餘りに有名な三井寺があつて依藤太秀卿に、大蛇が惚れ込んで琵琶湖の底から引き揚げて贈つたとかいふ鐘撞堂の四本柱は其の當時の工匠が特に後世への實物教材として



都の年千ゝるば

檜、杉、樺、松の四種を使用し耐力比較を示範して呉れた用意に對しては滿腔の感謝を惜しまないのである、尙湖邊に沿ふて一里半程行くと唐崎の松（二代目）がある、此處から十丁位行つて左りに少し登ると特別保護建造物となつて居る官幣社日吉神社がある。坂を元に戻つて更に一里餘り北方に堅田の浮見堂といふのがあるが大したものではない。近江聖人中江藤樹先生の書院及墓は大津から船で大溝迄渡り其れから一里許りの處にある。また叡山へは坂本からケーブルが出来たので婦女老幼でも樂に上れる。かねて我々の主唱で大正十三年八月十一日工費四十六萬七千圓で架設開通した瀬田の大橋小橋を右の窓から見てポートルエスの盛觀を思ひ起し、また紫式部が源氏物語りを書いた石

山寺や洗堰から魚階梯の邊りを望見して居るうち、早や石山驛に近くなつた。驛の裏は昔の粟津ヶ原で旭將軍義仲の戰死した所である。草津驛の名物姥ヶ餅を買ふ買はぬは一名の差で否決となり、暫時甘味や酒黨等に關する罪のない談話が車内の此處彼處を賑はして居るうち守山も過ぎ、野洲川の鐵道橋(長二四二間)にかゝると我々が大いに力説して大正十四年一月廿八日に工費三十八萬餘圓で開通した道路橋野洲橋(長二一五間)が眼前に現れた、佐藤技師の説(内務省に入る前滋賀縣に在職した關係で)から茂庭博士が道路改良會の功勞は國家的でまた汎人類的であると云へば、中川理事も舊橋は明治二十年に架けた木桁の板橋で橋體等も殆んど腐朽し空荷の荷馬車でも續いて渡ると危険千萬なものだつたと往時の追憶を語り、武井事務官や佐藤技師も新橋の鐵筋混凝土には能く注意をして置いたから之れなら大丈夫でせう幅員も三間半あるから當分は我慢出来ると都筑幹事も稱揚して居るが、其後は以上の橋は續々着工されて居るから力強い感じがする。

有名な蜈蚣松山も近づいたから忘れぬうちに説明を加へて置かう、參謀本部の地圖には三上山であるが古書には美山と記し上の字はない、こゝでは近江富士或はむかで山の方が通りがよいから其れに従つて置く、昔田原藤太秀卿が瀬田の唐橋を渡つて居ると、琵琶湖から大蛇が十七八歳の美姫に扮装して出現し、秀卿將軍の前に跪いて「これに渡らせらるゝは妾等日頃お慕ひまいらする秀卿の朝臣とお見受申し御願ひの筋あつて不躰ながら御目通り致します。男、女何歳とかにて席を交へずとは豫々教はり居りますれど、神代の昔は無論、昭和の末を豫想しても大學でさへ男女共學が公然許されようといふ世の中なれば、何卒お聽き届けの程幾重にもねがひ上げます」と來たので、秀卿朝臣は水野文部大臣が微笑まれた折の目尻よりも尙一時半程相好を崩つして「如何にも某は倭藤太である」と應鷹に出で、やをら娘がすゝむる床几に腰掛け「して願ひの趣身にて叶ふことなれば何なり共聞き届け得させうほどにさゝ遠慮なく話すがよい」と捌けて出たので、姫は愈々真劍となつて「向

ふに聳へまするを巽松山と申し周りが十三里も御座います。其の山を七卷するとか噂ある大百足が折々襲來いたしまして、幸等に危害を加へ願る閉

首に當つたけれ共ケーンと響いて跳ね返されたので、流石の藤太君も面目玉を失つて脚疑するを、姫は和莞一禮して

口して居ります。あはれ武將の御情けに後とは言はず今此處で射止めて下さいよネーあなた」ボンと

進み寄り第三矢に毒氣を吹き付け、『むかでの目玉に此の矢を射てよ』といふので唯恰諾々言ふが儘に番へて發矢と放てば、こは抑も如何に百

一つ脊中を叩かれたので、秀卿は反身になつて『治國平天下の爲め弓矢取る身且つは可憐の女性等に危害を加ふるとあつては捨て置くべからず』と氣色を含むで立上つたから、姫は好潮を帯びた流眄めで『御禮は何なり共御望みに任せまする』と全幅の媚を表現したので、藤太君夢中になつて喜び、強



蕨 澤 山 の 偉 績

野太打廻つて、さしも近隣を恐怖せしめた巽松族の等類と共に滅亡したので、爾來巽と松の字を連ねてむかでと讀むことになつたといふ、一方姫は橋上に端座して御恩の程は終生忘却致しませぬと満身の感謝を捧げ、何卒謝禮の道をお示しあれと追

弓第一矢は虚空を切つて放たれ、見事むかでの頭に命中したけれども矢はスーンと音して跳ね返へされ、第二矢また

まつたのであるが、秀郷は固く辭退したので姫は其夜の中に龍窟の鐘を秀卿朝臣の住む都の邸に贈つたといふこと

で、其れが今でも近江八景の一なる三井寺に現存する筈である、併し筆者は保證する程まだ更索する時間が無かつたから、若し疑問に思ふ人や研究家は嵯松山の三上神社と琵琶湖畔の三井寺とに參詣して自得するがよい。すこし百

足の話が長かつたので早や安土の小隧道に來た、この山脈の湖水に寄つた頂きに織田信長の築いた安土城址と信長の墓がある、車窓からチラ／＼見へるのが信長信忠の像を安置してある總見寺で、そこから見渡すと湖山の眺めが實に絶佳である、それから一しきり戰國時代に於ける英雄豪族等の批評が車内の倦怠を拂ふて二三驛を過ぎ井伊大老の舊城下彦根に入つた、眼前に聳立する天主閣は慶長年間の建築であるが今尙頑丈なもので縦覽を許してある、尙ほ舊城の外域には樂々園と稱する井伊侯の別業があつて毎年春季には美事な梅樹の盆栽を陳列し全國に誇つて居る、未見の人にはお勧めしたい程でまた數年前から八景亭と共に廣く開放して維持費の幾分に充當して居るやうに聞いて居る、希望すれば飲食や宿泊も出来る。また多計島には以前同縣

警察部長であつた水上七郎氏の發案によつて五條の御誓文を基礎とした「誓ひの御柱」といふ記念塔が建設され。畏くも皇太后宮から御下賜金もあつたやうに聞いてゐる。

サンドウィッチ

午前十一時十分米原驛でサンドウィッチ一個宛を買入れて東海道線に分歧し、右に伊吹山を仰ぎ、左に琵琶湖を眺めて北上すると、友禪縮緬やビロードや蚊張の産地として著名な長濱につく、東方には信長と淺井長政と大いに戦つた姉川の古戰場が展開して居る、秀吉の信仰した竹生島の辨天様に參詣するには朝夕長濱から汽船が通つて居り、桃山御殿の一部も猶この島に現存するのである。他の乗客も大いに英雄豪傑譚を戦はして居るうち虎姫、高月、木ノ本等の諸驛を過ぐれば秀吉麾下の七將加藤清正等が柴田勝家を敗つた賤ヶ嶽が西方一里餘りに立つて居る、秀吉は良い部下を持つたものだ等と思つて居るうち中の郷も過ぎ愈々柳ヶ瀬隧道(長七四四間)に入つて北陸道の天地に接するこ

とよなつた。それから二三驛の間は隧道に關する工學上の話しに花が咲き、十二時四十分敦賀に着いた。

一時間半程前に米原でサンド

ウィッチを買つたのであるが左

程腹の脹つた様子？否物足らぬ

と言ふので汽車辨買込みに東島

堀兩君が下車し、やがて辨當と

美事な柿二個宛が配布された。

敦賀の北方は水深く波靜かな敦

賀灣であつて他の三方は山を圍

らして居る、古く神代の頃から

海運の要衝であつたことは前號

にも記して置いたが仲哀天皇も

此處から亞細亞大陸に向つて、

雄圖を持つて居られたのである、現に仲哀天皇と神功皇后

を祀る官幣大社氣比神社も北面して造營され、また萬邦無

二の名木榿の木で作つた大鳥居も社頭に現存するのである

道路愛護宣傳歌

顔の笑くばは愛嬌でよいが
道の笑くばは見るもいや

道路よくすりや炭まさ下り
凡て生計が樂になる

道がよくなりや人智も進み
仕事も殖ふれば富も増す

思ひ出す度會ひたいけれど
道が悪いのでまゝならぬ

道の掃除と各自の顔は
いつも綺麗にしてほしい

道が悪くて賣るもの出せず
買ふもの高くて瘠世帯

一孤城、圍みを受くること五ヶ月、食全く盡きて戦ふこと十

餘日、賊將足利高經五萬の軍を率いて一ノ木戸を破り、副

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

此の鳥居は今を距る二百八十餘年前に建造されたもので高

さ三丈四尺もあり、且つ其れが只一本の榿の木で彼の大鳥

居を作つたといふから如何に巨木

であつたか想像される、如斯巨大

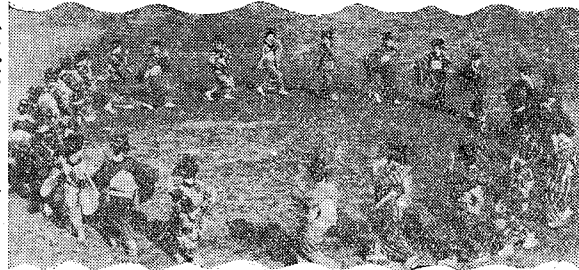
な榿の木は全世界を蚤取眼で探索

めても空前絶後であらう。氣比大

社を右に敦賀港を左にして一二丁

斜に鋪石を登れば官幣中社金ヶ崎

宮である、南朝の忠臣新田義貞が、



後醍醐帝の第一宮尊良親王及び皇太子恒良親王を奉じて孤軍よく奮闘した金ヶ崎城址は、社の後丘

松青く紅葉黄に吉野朝最後の哀史

を物語つて居る、嗚呼彈丸黒子の

一孤城、圍みを受くること五ヶ月、食全く盡きて戦ふこと十

餘日、賊將足利高經五萬の軍を率いて一ノ木戸を破り、副

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

將高ノ師泰四萬の兵を以て二ノ城戸を陥れたので、今はも

う是迄と延元二年三月六日守將新田義顯は第一宮の御前に跪き「臣はもと弓箭の家に生れたれば責を負ひ自害仕りまする、上は第一宮の御事なれば敵中に御出あるとも失ひまいらする事夢あるべしとも思はれず早や御用意の程を」と申上るや、尊良親王には言下に「我は主上の命を奉じ總帥として軍に臨めり、今汝等全たく報國死に就かんとす、我焉んぞ股肱が忠誠を後に生を望まん、夙く武夫の最も美事なる自害の範を示せ我は汝の刀を取りて直ちに汝の後を追ひ共に永く皇國を守護せん」と仰せられたので、義顯は感泣措くところを知らなかつたが時間経ちては叶ふまじと決心して刀逆手に割腹し、其の刀を御前にすゝめて俯伏したので、宮には血あと滑らなる刀に御衣の袖を巻付け御生害あつて義顯の屍の上に伏し給ふたのである、時に御年二十七歳で藤原行房卿をはじめ里見義成、氣比の大官司氏治、武田與一以下在城の將士八百餘人皆殉じ、城を出られしは當時御十四才なりし春宮恒良親王と、柚山城に在る義貞義助の下に金ヶ崎城最後の狀況を報じた船田長門守、土岐

阿波守、栗生友衛門、矢島七郎の四人だけであつた。自刃した氣比大官司氏治の嫡男齊晴は、皇太子恒良親王を鹽の上に板を置いて載せまいらせ（絹掛崎は恒良親王が逃がれ給ふ時松の本に御衣を掛け置かれた處で、この松を今は絹掛松と言つて居る）孤城重圍の中より脱出し、三十餘町の海を泳ぎ蕪木濱なる水主の家にこまゝ托してかくしまいらせ、再び城に泳ぎ戻り父氏治が屍の前に跪座し父の刀を籍りて我首掻き切つて悲愴の最後を遂げたのは、臣として上に事へまつるの道、子として親に對するの兩道を完ふしたもので、彼の亘忠景が延元二年正月二日の朝まだき、賊等が元旦の宿醉まだ醒めぬ間に刺す如き潮風と寒氷去來する中を、櫛川の島浦から、賊軍の見張りを避けてよく潜泳し、吉野なる後醍醐帝の勅書を髻に結び込んで入城したる勇敢なる心膽と。瓜生保の率いた金ヶ崎救援の一千餘騎が途中で、賊將師泰の大軍二萬餘と激戦して保兄弟甥従弟等多數之れに斃れ、五百餘人は疵を被り啼哭柚山に充ちたけれども、保の母は少しも慨かず家代々の譽れであると自ら

傷者に醫藥を施して勞わり、脇屋義助等將士に對しては必らず力を落し給ふな、足利を助くる九州勢とて昔は日本武

百名を凍死せしめた險路であつて新保驛の東方二里餘にある、驛の近傍一里餘りの間は最も激戦のあつた處で刀劍の

御一人に叶はざりし例めしもあれば兵寡なしとて、何の恐るゝことやと酒を進めて勵まし、また一方義貞が募兵の使者に周到なる注意を與へた如きは武人の母として實に見上たもので、第一の宮の御言葉は申すも畏こき御事であるが氣比齊晴、亘忠景、及瓜生が母の悲壯なる尊王愛國の精蘊と至孝至仁なる美德とは實に我國の花で萬世に範たるものと考へる。氣比の松原十町は今公園となり松原神社には武田耕雲齊以下三百名の英靈を祀つてある。

福井縣を嶺南と嶺北とに岐つ木ノ芽峠は金ヶ崎の官軍敷

ふことである。鯖江は間部氏の舊城邑で商工及漁業の盛んな處である、驛の東南一里餘にある城山は瓜生保の據城址



面場一の牲犠き貴 畫映

斷片や壘址を散見する、杉津は山間の一小驛に過ぎないが海拔六百尺に達し敦賀灣の風光を眺むるに絶好の場所である、大桐、今庄、鯖波五里の間は足利勢參萬餘の大軍を官軍方なる義鑑坊が率ゆる僧兵一千農兵三百餘の爲め追いつ戻しつ散々なやました處で、嘗て木曾義仲も平家の大軍を蹴散らした古戰場である。

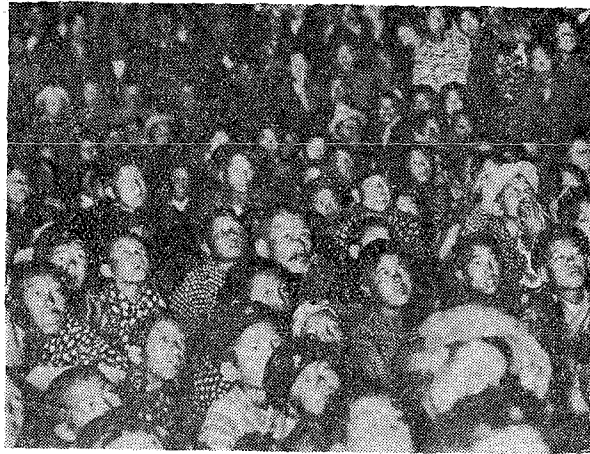
謠曲で名高い花筐の櫻は武生驛から二里餘の味眞野にあつて花時（四月下旬）には田部迄乗合自動車が行くので探勝の客が頓に増加したとい

で西北の琵琶山は戦死者供養の爲め彼の義繼和尚が鎧の上に墨染の衣を纏ひながら日夜讀經した處である。また太土呂驛の東南二里餘には朝倉氏が北國に雄飛した時代の一乗城址が残つて居る。愈々福井市の豊も見へ出した。同市は北陸道屈指の都會であつて松平氏（徳川秀康の第二子忠昌以降累代）の舊城下である。今は輸出羽二重の集荷地として世界的名聲を有する外、越前雲丹、足羽蟹、新井羊羹の三名物で甘黨にも辛黨にも憎みみの多い處である、市の中央には足利氏足羽七城の一であつた柴田氏の居城を慶長年間徳川秀康（一に結城秀康ともいふ）が大に修築し過ぎて肉親の江戸表から吐責を蒙つたといふ因縁付きの壘壁城濠があつて今は縣廳や議事堂や地方裁判所等も其處にある。また市の西南部に見ゆる丘は足羽公園で山頂には男大迹皇子がまだ皇位に御即きにならぬ前約三十年の長日月を専ら北邊開拓に御從事遊ばされた高德を記念する御銅像が建てられてあるが、遺憾なことには銅像の出來榮へが甚拙いと思ふ、併し眺望は申分ない、同じ足羽山の突崗に別格

官幣社藤島神社があつて新田義貞、脇屋義助、新田義宗、同義顯、同義興等を祀つてある。同社の寶物としては後醍醐天皇が義貞に賜はつた三十番神の兜を第一とし、楠河内判官正成が建武二年二月三日付で新田左中將源義貞に送つた書翰、義貞から小三郎殿とした延元元年十月九日付書翰、弟脇屋義助が幾轉戦した軍配等は國寶以上の國寶であらう。足羽山の麓にある淨土宗森嚴山運正寺といふのは越前守松平秀康を亡くして後、夢見が悪いといふので家康が蓮馨僧正に命じて秀康の菩提を吊ふ爲めに建立した寺であるから是亦寺寶を有して居る。これと程遠からぬ善慶寺の墓畔に勤王の志士として名高い橋本左内の墓がある、左内は少し過激であるといふので安政六年幕府から捕へられて千住（東京市外）の小塚原刑場で三尺板の上に曝されたのであるが後に赦されて文久年間此處に埋葬したといふことで墓石には「景岳先生墓」と刻つてある。午後三時福井停車場に着いて縣市其他多數の出迎を受け自動車を縣廳に驅つた。

福井に於ける講演會(十月十二日)

階上の應接室に陳列してある縣物産を見て、市村知事、土居内務部長から種々縣下の狀況に就て説明を聞いた、福井縣は若狹、越前二國から成り北は石川縣東は岐阜縣南は滋賀縣西は京都府に接し西北は日本海に面して不規則な逆さ瓢箪の形をなし面積は二百七十四方里ある。道路は地勢の關係や歴史の感化によつて、何等進歩の見るべきものがない、山岳丘陵諸方に蟠踞し、一ノ峯二ノ峯三ノ峯、長刀山、大洞山、池洞山、大日嶽、毘沙門岳、天狗山、赤鬼山、尾白山等其他多數の峻峰が亂立して居る爲め平地は僅々五十餘方里しかない、米麥の産



地として見るべきは九頭龍川二十八里の流域を最とし之れに亞ぐは北川、耳川、鱒川、佐分利川くらいで他にはない、

貴き犧牲に感動せる觀衆

即ち木材薪炭及水産には恵まれて居るけれども農産面積が少ないので道幅の如きも大いに狹隘で漸やく牛馬が往來し得るに止まつて居る。また鎌倉幕府以來統治上の變革が甚しかつた爲め道路の改良等は一部の行はれた蹟はあるけれども系統的なものは一つも無い。名は福井縣でも實は反福井否福井である。毎日歩るく悪路には親も泣いた自分も閉口して居る子も苦んで居る孫も迷惑せうと、もう氣がついて好からう。

めに、木ノ芽^み其他に見張所を設けて嚴重に固めさせ、時宗は敦實及武生に府尹を派して内外に備へたことは有名な

事實であつて、時頼も北の庄に目代を置き八方に眼を配つたので高時が没落に至る迄八代の間は手も足も出なかつたのである、たゞ百姓は田を耕し、樵夫は山に、漁夫は海に鱚でも獲つて一生を終れば夫れで濟むで居たので、道は何處まで通じて居るか知らなかつたのである。北條亡びて後足利尊氏は同族高經に侵略を命じ大聖寺川の右岸まで及んだのであるが、高經の死後其子斯波義勝が之を領したけれども連年の兵禍は到る處に不毛荒圃を生じ道路營繕の如きは捨て、省みず荒圃の中を自由に通つて居つたといふことである。其後山名時氏、大高重成、細川清氏、石橋和義、一色範光等諸所を領有し、織田信長安土に入るや若狹には武田、丹羽、淺野、木下、京極等をまた越前では北の庄を柴田勝家、南條郡を前田利家、今立郡を佐々成政に與へ後幾何もなく成政を越中に移したのである。次で豊臣秀吉は勝家を亡ぼして前田利家に加賀を與へ、越前一國を羽柴長秀に與へたのであるが、後に其子長重を斥けて北の庄には堀秀政、敦賀に大谷吉繼、東郷に長谷川秀一、丸岡に青山忠

元、大野に織田秀雄を封じ、慶長二年には秀政の子を越後に移封して青木一矩に北の庄を管せしめ更に同五年府中を堀尾吉勝に加封するといふ具合に常に動いてばかり居たので何等見るべき施設なく、従つて民心も安定する暇がなかつたから路政は久しく放任された儘で、田畑の畔から畔を往來した迂舒曲折する道路の名残は今でもまだ到る處にある。大阪夏冬二陣、關ヶ原天下分け目の役には國內の人馬糧秣多くは徵發せられて残るは老幼と山川のみになつたので結城秀康は領内の復興を目論見其の完成までは江戸の諸制度に從はぬ方策を執つたので家康秀忠に謫せられ秀康の第二子忠昌が後を繼いで北の庄を福井と改め、其の弟直政を大野に、直基を勝山に、直良を木ノ本に分封し、其間に酒井忠綱を敦賀、間部詮言を鯖江に配置して表面は平靜に歸したが、戦死せる父祖の菩提を吊ふ爲めまたは行方不明の兄弟を探がす爲め或は出家し或は郷を去る者風をなし眞の産業は明治に至るまで大なる興隆を見なかつたのである、明治になつても初めは本保縣を置き、後に之を廢して敦賀、

福井二縣とし、また改めて足羽と稱し、更に改めて敦賀に併せ四たび改廢して若狹越前二國を福井縣としたので、昔から統治甚だ錯雜し系統的脈絡を缺如して居たことが能く推察されるので

格のナローバツセージである。市役所附近が既に之れである。して見れば道路の恩惠から見放なされて居ることは大低想像されやう。併し永井市長は十年以前東京市助役時代

あつて、道路感

●お互に道路を愛しませう！

代に道路改良會役員として活動

念が發達しなかつたのも強ち咎むべきではなからう。

開催日 十月十日(日) 講演午後四時半
会場 福井市公會堂 活動午後七時
講 元復興院副總裁 松本善一郎
元鐵道次官 中川正左
内務省道路課長 丹羽七郎
師 土木事務官 佐藤利義
道路改良會責任幹事 田中好
郡築通督

之れで稍福井

●道路改良に関する講演●

道路改良講演會 活動員會

●道路の改良に努めませう!!

路や耶馬溪遊覽道路に實地經驗を有するから縣民諸君の自覺と相待つて、相當産業經濟に資益

は少し早いけれども、自動車で福井公會堂に向つたが、市

する道路が出来ることゝ信じて居る。會場を覗いて見ると

役所の入口附近は狭まい露路で先づ昔の辻斬り横丁といふ

入口の立板に講師丹羽内務省道路課長田中土木事務官、都

縣の地理、歴史、産業、道路に關する一般的豫備

智識を得たの

で、講演時間に

筑専任幹事となつて居るから、直ぐに武井内務事務官に書き直して居るうち早や學生の一團が入つて來た、何處でも多く學生が先登を切つて賑やか過ぎるのであるが、今日は頗る靜肅である、市の内外から續々有志も參集しまた警察關係、土木關係の吏僚も百人以上入場したので廣い會場も大半埋まつた。

午後四時半市村知事登壇福井縣下の道路交通に關し約十五分間所感を述べられ、次に「道路は一國文野の象徴なり」といふ演題で、佐藤幹事が歐米の實情をも引例して約三十分、次で武井幹事が「道路の改良と其財源に就て」といふ題で受益者負擔制度其他種々財政方面の立前に就て三十分以上に互り詳論し、茂庭博士は「道路の維持に就て」といふ題で約三十分間道路の利用と其維持愛護に注意するの要あるを戒告し、中川理事は「道路の改良と將來の交通」と題して地方の交通量其他産業狀態より鳥取、岡山等に於ける實例を引用して聽講者を感動せしめ、最後に永井市長は福井市の將來と道路交通の改善に就て約二十分間東京市

八幡市等に於ける幾多の成功と失敗とを正直に披露して聽衆を引締め尙活動寫眞に就ても映畫の大意を説明して降壇、午後七時青木土木課長閉會を宣して福井市に於ける講演を終つた、同七時半縣市聯合の歡迎會に臨み市村知事の挨拶に對し中川理事一行を代表して謝辭を述べ、歡談四方に湧く頃體重三十五貫の名妓現はれて、都筑幹事が寫眞は無いか足袋は何文か年は幾つか階段の昇降はと連發する質問に、答ふる所を側で聞いて居ると其聲は體量に似合はぬ驚のやうな優雅な聲で明瞭に答へて居る、矢張り女性であると思つた。併かし中川理事の三倍、都筑幹事に二倍する重量を有するのであるから實に感心の外ない。一方活動寫眞は午後九時四十分所定の映寫を終り千餘の觀衆は多大の感動に打たれて散會した、我々は午後十時細雨風に亂だれ或は横に或は逆に吹き捲る中を自動車に揺られて縣の幹旋にかゝる芦原旅館に着き、中川理事は縣土木課委員青柳氏等の勞を犒ふ爲め一盞を傾けて共に干盃し一同午後十一時寢に就いた。